令和6年度 園評価書

園番号 25 園名 静岡市立東豊田中央こども園

I 経営の重点に関わること I 経営の重点に関わること 評価段階 (A:よくできている B:概ねできている C:あまりできていない D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
「好きがいっぱい 心豊かに表現する子」	「気づき 考え やってみよう」	興味や関心を持ったことに積極的に関わろうとしている	子どもたちの姿を見取り、発達や興味を捉えながら遊びに必要な環境を用意することで、一人一人が自分のやりたいことや一緒に遊びたい友達を決め楽しむ姿がある。「明日もやりたい」と継続して遊びを楽しむ姿も増えている。保育者が遊びから離れるとあきらめてしまうなど、自ら探求しようとする姿は少なく、「自分から挑戦する力」はまだ弱い。	A	A	・乳幼児期は泣いても物に当たったとしても、自己表現ができているだけで良いのではないかと。自分の思いを言葉にして伝えるというのは、小学生でも中学生でも難しい。素直に自分を出せる姿を評価することができる。	・子ども達が自ら人やもの、ことに関わろうとする姿を見逃さずキャッチし、共に遊び、楽しさを探っていく。その際、複数の子で遊びを見取り、保育者同士が語り合うことで、子ども達が何に楽しさを感じているのかを多面的に捉え、実践へとつなげる ・子ども達が大人との関わりを十分に楽しむ中で、振り返りなど自分の思いを表現する場を意識的に作っていく。 ・保育者が先回りして声を掛けたり先導したりするのではなく、子ども達が考え、自分から発信できるような声掛けや見届けを行う。 ・可動遊具やマルチパネルなどを利用して、子ども達が「やってみよう」と感じる魅力的な園庭環境を職員と子どもで共に作っていく。また、保育者が一緒に遊びを楽しみながら一人一人が挑戦する気持ちを支えていく。
		自分の思いを言葉や態度で表現し、職員や友だちに認めてもらいながら、園生活を楽しくしている	保育者に思いを受け止めてもらうことで、安心感をもって生活し、身近な人に親しみを持ち自分から関わろうとする姿がある。活動の中で、友達を励ましたり認めたりするなど、自分の気持ちを素直に表現する姿も増えた。一方で思いの伝え方が未熟で、泣いたり物や人に当たったりする姿もあるので、職員間で協力して子どもの思いを理解し支えていく。	B	A		
		思い切り身体を動かして遊ぶことの楽しさを感じている	戸外での遊びや運動会、発表会などの行事を通して「きつとできる」という気持ちを育み、身体を動かすことの心地よさや、できたという満足感を感じながら遊びを楽しむ姿がある。秋以降、乳児と幼児の園庭利用の時間を分けた事で、広いスペースで安全に遊びを楽しむ姿が増えた。環境が固定遊具、築山頼りの為、全身を使って遊ぶことができる環境作りを進めていく	B	B		

II 各領域に関わること II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	就学までに経験させたいことを意識し、0歳児からの連続性を持った教育・保育を行っている	園内研修で歳児別の発達について話し合うことで、子どもの実態や成長の段階、発達の連続性についての理解が深まり、次の育ちに向けて必要な遊びやかかわりを考えられるようになった。月案や遊び地図作成の段階で、子ども達に経験させたいことをより具体的に話し合い、発達の連続性を意識した教育・保育活動を更に進めていきたい。	B	B	・安全管理について…今年は今までのやり方で計画的に避難訓練などを実施できているので、それは評価ができる。今後、減災という新しい考えを取り入れ、訓練を行うという意識を職員がもつことができているので、次年度の計画に生かしていくとよい。 ・支援体制について…一人一人へのサポート体制ができているのであれば、達成されていると評価できる。職員全員に子どもの特長や支援方法を周知できることは理想だが、現実的には難しい話である。周知の方法が工夫できるとよい。 ・研修のやり方を見直し、グループワークなどを多く取り入れ、話しやすい雰囲気を取り組めたこと、それにより学びが深まったことは評価できる。職員全員参加を目標に掲げても、子ども達がずっといることや、職員の勤務状況により難しいと思うので、参加できない人もいてと考えて、情報共有の方法が工夫できるとよい	・各学年の子どもの実態と発達においての到達目標の目安、行事や遊びの具体的なねらい等を、保育者間で話し合い共通理解する。クラス運営案の立案の段階から、他学年とのつながりを話し合うことで連続性をもった教育・保育活動を行う ・担任が子どもへの対応や家庭への配慮事項などについて、他職員にも伝え情報共有を行い、園全体で子どもや家庭への支援を行えるようにする。また、文書での伝達だけでなく、口頭での伝達が行えるよう、会議報告の時間等を設けていく ・振り返りの時間を作り、次の遊びにつなげる。また、子どもから得たヒントをすぐに環境として構成し、興味が高まっている時に教材や素材を提供できるように準備を行う。環境を充実させるために、『遊び環境作り』の分掌を作ったり、遊び地図からの実践を当番制にする等、環境を作る役割を明確化する
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の育ちや生活状況、家庭環境を考慮し、園児が安心して過ごせるような関わりや援助を行っている	B	B		
		(3)環境を通して行う教育及び保育	遊びの興味関心が広がり、主体的に遊びをすすめられる環境が整われている	B	B		
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な状況を想定した避難訓練、不審者訓練を行い、職員が自ら考えたり連携を取ったりして不測の事態に備えている	様々な災害を想定した訓練を計画通り実施することで、自分から身を守ろうとする子ども達の姿が育ってきている。今年度、減災教育の研修に参加した職員が、そこで得た知識を会議で発信したことで、職員の意識も変わった。訓練後の反省や改善点についての周知が不十分の為、会議録だけでなく口頭での伝達を行い、周知していく。	B	A	・生活習慣の見直しを行う為、食育の会やお楽しみ会でも、手洗いやうがいの大切さを体の健康と関連付けて話していく。また、年齢における衛生習慣の確立について職員間で共通認識し、一貫した指導を行っていく。 ・子ども理解を深める為に、個別支援計画や日誌などは誰もが目を通すようにする。また、支援方法については担当が他の職員にも会議などで発信し、特にクラスに入ってくれるフリーの先生には口頭で確実に伝えるようにする ・大きな行事等の取り組みは早い段階で企画案を提出し、役割を明確にする。会議などで進捗状況を確認し、担任だけの負担にならないよう、職員全体で計画的に準備を進める。	
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	年齢や生活経験に合った手洗い・うがい、歯みがきなどの基本的な生活習慣を家庭と連携を取りながら丁寧に指導している	歯みがき指導や食育の体験活動などを通して、自分の体の健康に対する関心は高まっている。基本的な生活習慣は子どもの年齢に合わせて指導しているが、見届けが不十分な事もあり、身につけていない子が多い。具体的指導について職員間で統一できていない為、各年齢の目標を定期的に確認し、一貫した指導を行うと共に家庭にも呼びかけを行っていく。	B	B		
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	子ども一人一人に合った支援計画を作成し、職員間で共有しながら、園全体でサポートする体制をつくっている	アンパンマンの会の反省会や、会議での話し合いを通して、支援が必要な子の特性や支援方法を知り、子ども一人一人へのサポート体制を作ることができている。保護者とのサポート面談も計画的に実施され、家庭と園で協力して支援を行っている。今後、担当以外の職員が特別支援の会などに参加する機会を増やし、理解を深めていく。	B	A		
5 組織運営	(1)組織体制の充実	各職員が自分の分掌の役割を理解し、リーダーを中心に準備や取り組みが協力して進められている	時間がない中でも話し合いを経て、協力して行事や活動を進めようとする職員の体制ができている。また、立場に関係なく全員で役割分担し園運営を行っている。日頃から保育準備の時間を作り出すことが難しく、行事や活動の準備が間際まで整わないことや負担が偏ってしまうことがある為、先を見越した計画や準備を行っていく。	B	B		
6 研修	(1)研修体制の充実	研修テーマ「もっとやってみようを引き出そう!」の手立てを実践し、研修やワンチームタイムを通して職員全体で学びを深めている	今年度、研修方法を見直したことで、研修テーマや手立てに合った内容となり、学びを深めることができた。公開保育の事前、事後研修もグループワークを多く取り入れたことで話しやすく参加しやすいとの意見が多かった。保育時間内での研修実施の為、参加できない職員もおり、職員全体で学びを深めるのは難しい為、研修のやり方や以後の発信の仕方を更に見直ししていく。	B	A		
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	素材や教材の使い方や遊び方を研究したり、遊び地図を作成したりし、子どもの興味関心に合わせた環境の準備をおこなっている	月末の会議内で遊び地図の検討と作成を行うことで、職員で話し合い、学年を越えて遊び環境の準備をすることができている。しかし話し合いからの実践力が弱く環境作りが十分でないため、子どもの遊びが深まっていかず、環境も後出しになってしまう。素材や教材の研究も夏の遊び以降できなかつた為、計画的に行い保育に生かしていく。	B	B	・評価基準の見直しを考える…職員の自己評価の数値だけで園の評価を決定すると、Bが多くなる傾向がある。評価基準をどう考えるか。現場の職員がB評価をつけたとしても、園長や副園長が達成できていると思うところはA評価をつけられればよい。そうすることで、職員の自信につながり、結果として教育・保育の質が向上していくのではないかと	
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	子どもの日々の姿や活動を、ドキュメンテーションやおたよりでわかりやすく示し、子どもの成長を共に喜び合える関係ができている	写真を多く取り入れた掲示、カラーのお便り等で子どもの様子を発信し、成長の様子や遊びの経過、教育活動の意図など伝えることができている。今後、文書の電子化に伴いコドモンを利用してお便りやドキュメンテーションを配信することが増えるので、配信を知らせることと、必要に応じて文書を渡す、一定期間掲示をする等、発信の工夫をしていく。	A	A		
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	東豊力を意識した教育・保育活動を展開し、幼小中学校との交流が行われている	今年度、園目標をTOHOの教育目標と合わせて変更し、連続性を意識して教育・保育活動に取り組んだ。公開授業では卒園児の様子を参観したり、TOHOの会議でも子どもの実態や育てたい姿について話し合ったりし、地域の子どものことについての理解を深めることができた。子ども同士の直接的な交流は持つことができている為、無理なくできることを考え学校への働きかけを行っていく。	B	B		
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	子どもが地域の良さを感じるよう、地域資源、自然、人材を活かした行事や活動が行われている	動物園の学びプロジェクトの実施、交番や消防署への勤労感謝訪問など、地域の施設に出かけ関わりをもつことができた。また、囲碁教室、焼き芋など園外の方と触れ合いながら体験活動を重ねた。今後、横の日本平学園とポッチャの交流を行うなど、新しいつながりもできるので、地域の人材や資源を活かした計画を作成し、教育、保育活動に取り入れていく。	B	B	・各学年が園外保育計画を年度当初に作成し、毎月の散歩の計画を確実に立て、地域に出かける機会を作る。昨年度作成した散歩マップを保育に生かすため、地域資源を保育に生かすための園内研修や、地域とのかかわりを計画、実践する分掌を作り、保育実践につなげていく	